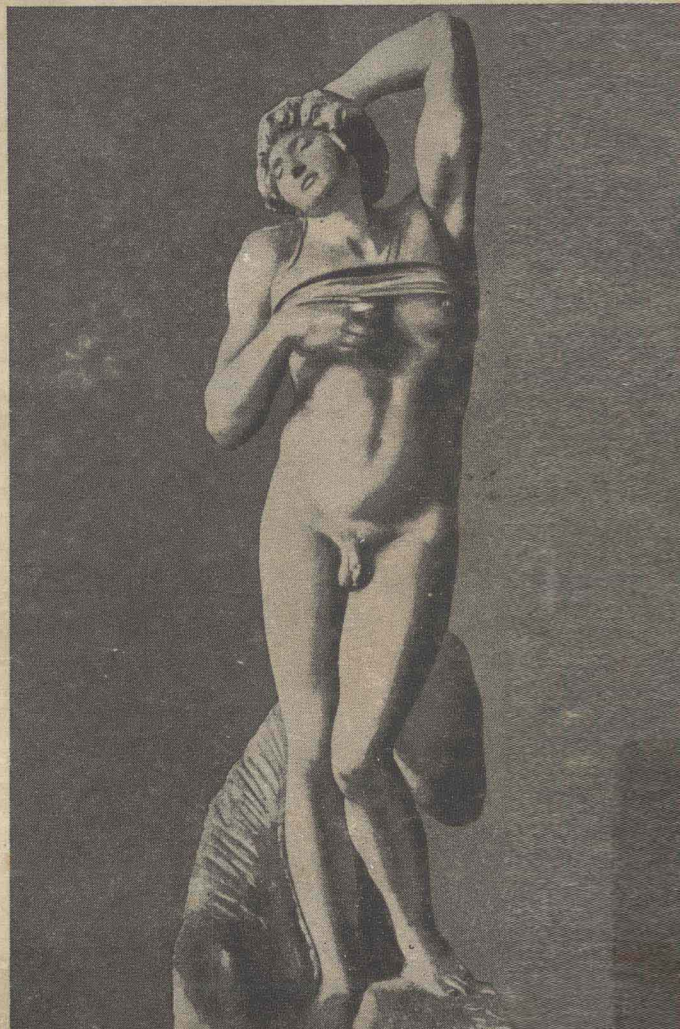


わだつみのこえに應える

— 日本の良心 —



謹しんでこの一篇を
戦歿の諸兄に捧ぐ

わだつみのこえ
に應える

——日本の良心——

東大協同組合出版部

あとがき

「憎まないでいい敵を殺さないですみますように」という言葉さえが、あの悪夢のような戦争のさ中ではどんなに口にし難い言葉であつたか、今私たちはもう一度ふりかえつて見る必要があるのではあるまいか。「生への執着は、生への力強い肯定にまで高められませんがしかも尙お肯定はそのまま刑場に通ずる“今”の道でありました。」という悲しくいたましい言葉を生き残つた私たちはもう一度胸の中にくりかえす必要が今日あるのではないか。生き残つた私達は一見していてごらん。きつと私達の時代がくる。」といつた戦歿者の平和への意志を生かすべく、『はるかなる山河に』を、そして『きけわたつみのこえ』を編んでいつた。深刻な世論の渦はそれを正当に反映して、私たちの前には千余の投書が生まれ、その一つ一つに平和の意志は固められていた。

しかし——『きけわたつみのこえ』は当時の学徒兵の実体ではなく、全く特殊な人々である——というようなことが、東京の学生映画研究会の一部の人の意見として報ぜられたこともあ

る(五月八日學園新聞)。その人たちはもつと勇壯であり積極的な愛國者であつたとしてもいふのであろうか。だが私たちは戦争という國家の狂亂期において、正常の理性を保つことがいかに難しいか、それがどんなに勇氣と知慧と配慮とを必要とするかをまさまざと見て來たのではなかつたか。私たちが恥じるその日の事を今さらけ出すことに臆病であつてはなるまい。悔恨の傷痕を蔽い、反省の糧をさけてはならない。まして、傷痕癒えやらぬうちに、また新しい戦争のしのびよる氣配を毎日の生活にひしひしと感じつつ、平和を論ずるにも「守る」といふ言い方で表現せねばなくなつてゐる時、あらゆる角度で私たち自身を批判しつづけなくては、私たちはふたたびこれよりも一層みじめな「わだつみのこえ」を書くことになるであらう。わだつみのこえは二度と書かれてはならない。私たちは一切の戦争に反対する。これが私たちの念願である。

「蛇足」といつた感じを起されるかも知れないこの編集を私たちに敢えてなさしめたものは、以上述べ來つた理由が一切である。平和を求める善良な市民の数多い一方、戦争の声が次第に高まりつつあるという、一にこの客観的な情勢の変化、杉先生が冒頭に述べられた如く「平和」を冷笑する人が現れているという事實が私たちにいても立つてもいられないものを感じさせる

からに他ならない。十三部門に分かれて二万学生職員の生活擁護を目ざす東大協同組合が、幾多の赤字と斗い、税金に苦しめられながらも、進んで百万円を戦歿学生記念会に投ずることを総会の全会一致において決定したのも、戦争こそ、戦争を予想し、戦争を準備する一切のものが、それ、われわれの生活を脅かす大前提であることを確認し、平和を守ることに異常の苦難を覚悟しても努力すべきであることを正当に評價したからに他ならない。誰に利用されるものでもない。ただひたすらに私たちが私たちの平和を守るためであり、私たちの自由を確保するためなのである。人をついで何等かの名声や利益を得ようとする意図などがある筈はなく、誰人もこれについては異論のないことと確信する。

私たちのささやかな企てに快く筆をとつて下さつた多くの方々に、そして感動の言葉をよせて下さつた『きけわだつみのこえ』の幾万の読者の方々に心からなる感謝の意を表し、あわせて記念会を中心に平和の礎石が見事に築かれてゆくことをお願いしてやまない。

一九五〇年五月

東大協同組合出版部

目次

わだつみの声に寄す

杉 捷夫 (1)

平和への希い

藤原 咲 平 (5)

「わだつみのこえ」になにをさくべきか

出 隆 (9)

「きけわだつみのこえ」に寄せて

上 原 専 祿 (29)

「きけわだつみのこえ」に寄せて

都 留 重 人 (33)

——あわせて反戦運動の犠牲を想う——

生き残つた人々に希う

竹 山 道 雄 (36)

新しい年に與う

松 下 裕 (40)

——「日本戦没學生の手記」を讀みて——

日本の一つの証として……………高田博厚(83)

生かされねばならぬ感銘……………佐多稻子(49)

人間劇の喪失……………小林秀雄(53)

わだつみのこえに答えるには……………末川博(56)

日本の良心……………柳田謙十郎(61)

鳥の大尉の祈り……………市原豊太(66)

——戦歿学生の手記について——

きけわだつみのこえ……………加藤周一(84)

見果てぬ夢……………深瀬基寛(87)

平和への祈り……………本多顯彰(93)

お父さんダメよ……………藤枝時子 (104)

——戦争なんてとんでもないこと——

同じ世代の一人の感想……………岩本一郎 (110)

「きけわだつみのこえ」の教え……………手塚富雄 (115)

なんの怨があるというのだ？……………丸山薫 (119)

万感のなかの一感……………竹内好 (123)

——「きけわだつみのこえ」について——

私たちに問いかけるもの……………日高六郎 (127)

試煉の時……………河盛好藏 (133)

人間と人間を結ぶ絆……………森有正 (137)

あるのらなかつた手記について……………

野元菊雄

(147)

——戦中派に訴える——

「きけわだつみのこえ」と日本の現実について……………

湯地朝雄

(157)

わだつみのこえにきく……………

寺田透

(167)

「平和への悶え」と「平和への斗い」……………

土方與志

(174)

戦歿學生記念會について

遺族からの手紙……………

山根徳太郎

(1)

全面講和と平和……………

安倍能成

(4)

わたしの感想……………

野口肇

(8)

あとがき

わだつみの声に寄す

杉 捷 夫

この七十五人の——何千人の中からえらばれた——戦歿学生の書き残した短い文章のどれ一つでも、私の胸を突き上げ、喉をつまらせ、拳をにぎつて駆け出したい衝動に私をかり立てないものはない。しかし、私はじつとそれに堪える。涙を流してはならない。私の目は乾いていなければならない。できるだけ冷静に読まなければならない。冷静でいなければならない。私は駆け出しても、彼等の手を握ることはできないのだ。彼等とははやい。彼等は死んでしまった。これだけは確実なことだ。彼等とははやい。この七十五人の学徒は、そして、彼等のうしろに何千人の学徒が、もう永久に帰つて来ないのだ。これだけの言葉を我々に残して、そして、言いたかつたにちがいないもつとたくさんのことを胸に包んだまま、死んでしまったのだ。彼等の死は、そして、彼等の残したあすかの言葉は、我々の恥を、私の恥を、一層強く

下らし給ふ。私がいくら海難に読んでも、海難でありすぎることはないであらう。私は彼等の言葉を「一つ噛みしめなければならぬ」「悲しき哉、浅間しき哉。人類よ、親の親類よ。」

(長谷川信) このような言葉が、たとえ私に拷問の苦しみをなめさせようとも、じつとがまんして読まなければならぬ。この言葉を残した、残さなければならなかつた長谷川君の苦しみは、その何百倍だつたにちがいないのだから。彼等がここに記さなかつた、そして記したかつたにちがいないこと、それが何であらうとも、その中に、戦争はいやだ、もう戦争はやめろという叫びがあつたにちがいないことを、私は疑うことができない。たとえ、岩ヶ谷君のように、「日本人の死は日本人だけが悲しむ。外國人の死は外國人のみが悲しむ。どうしてこうなければならぬのであらうか。」と、書き記している人でなくても、もし今生きて、我々の間に帰つて來たら、きつと、同じことを叫んだにちがいない。それはもう疑うことができない。この書物のどのページからも湧き上るこのものはや歸つて來ない若者たちの善意のうめきが、私にそれを信じさせる。わだつみの声に、それよりほかの声を私はきくことができない。どうして、それ以外の事を思ふことができないか。はてしなきわだつみの声は私の胸をしめつけ、私の顔をまつすぐ前に向けさせる。どのような苦難をしのいでも、平和を守る道から、私が一步も足をふみは

ずさないように、私の肩をしつかり押さえつける。

私は君達の声の導く方に進もう。空虚な言葉で君達を勵ますよりほかのことを——せいぜい、からだをたいせつにという一句に万感をこめるだけで——しなかつた私の恥が、それだけで拭かれるかどうか、それは知らない。しかし、それをしなければ、ほかに何をしようとも、私の恥が拭われないことだけは、たしかだ。君達は、死んでしまつた君達は、君達の死んだあとで、またもや人々が殺し合う時が来る時があると、信じたであらうか？ 生きてゐる私は、またもと、かなり、たくさんの方が努力している。君達が危険にさらされた時、それができなかつた頃にくらべれば、格段の相違だ。しかし、現実の嵐はきびしい。嵐に堪えかねて、もう努力は無駄だと言っている人もある。いや、努力を嘲笑する人さえあらわれた。その人達は、自分だけは安全なところへはいれると思つてゐるようだ。そこへついて行こうとしないものをほがゆがり、冷笑する。君達の声のきこえない人、聞こうとしない人。私は、今、その人達を憎む。私にその人達を憎む資格がないというのか？ 私にはなくても、君達にはあるだろう。君達の声のきこえる私には、私達にあげられる冷笑が、君達への冷笑としてひびく。

死んだ人々は、もはや黙つて居られぬ以上、
生き残つた人々は、沈黙を守るべきなのか？

フランスのある詩人はこう歌つているという。（渡辺さんの序文）

私もくりかえす。

我々は沈黙を守るべきなのか？

黙らされていいのか？

君達の声を冷笑する人々に、どんなにうるさがられようとも、私は黙らない。かつて黙つたことのある私は、今度こそ黙らない。

わだつみの声がきこえる限り、私が生きている限り、私は黙らない。

これが君達の声に答えるたつた一つの道ではないのか？

平和への希い

藤原 咲 平

御依頼の御趣意と「きけわだつみの声」一部、たしかに藤原貞子より届けられ落手しました。もともと私は悲劇ものも喜劇ものも、余り好みません。只敬虔のもの、眞情のもの、努力のもの、幽玄なものなどが好きです。殊に戦争では正直の処、始まつた以上、勝ちたいと一生懸命でしたから、敗けて目が覚めて、馬鹿だつた事を思い、後輩や國民に對して、深く責任を感じ、骨身のつすく限り老軀に鞭打つて、幾分かでも復興日本、文化日本の建設にお役にも立ち、世界の平和、文化に貢献したいと思うたのです。それで戦争の悪夢は努めて思い出したくはないと思ひました。だから戦争物はどうしても読む氣がしなかつたのです。所が先頃姪の「流れる星は生きて居る」が出ました。特別の關係から読んで、始めから終りまで涙を流し通しました。

併し、もうそれまで他の戦争ものは読もうと思いませんでした。實に戦争の怖ろしさの現れです。

お褒めなれ、つい誤りました。私は今病中で通勞はいけないのですが、読むと同情と、情熱が
おき起る、遂にあことわりをする積りだつた初志を翻して筆を取りました。それは平和への希
いからです。實に一番めの手紙の学生さんの云われた、人間の本性を考えて、自由主義こそ合
理的だと思ふということに打たれました。勿論私も、私の先生の岡田武松博士も戦争は嫌いで、
岡田中央氣象台長はそのため昭和十六年七月に遂に退職され、しかたもないので私が跡をつ
ぎ、どうにか、喧嘩はしながらも國の爲めだと我慢して軍に協力しました。勿論協力するから
には一生懸命に働きました。其當時を省みて、私は根本では皇室を尊敬する平民主義、平和主
義でありながら、到底此学生さんのようにはつきりと是非善惡を判別することをしなかつたの
です。二十才位の此若い学生さんが、本当によくも是れだけの事を此當時言われたと、実に
驚嘆して耻じ入りました。のみならず、此学生さんは勝敗も見抜いています。それも形勢から
ではなく、理義の上からです。また一國の興亡を些事とも達観しています。全く教えられます。
あの頃私には迎も迎も些事どころか、重大もく、身命を投げ出して戦う積りでいました。

其次の方の言われたことも、仲々達見と見ました。尤も其最後の行は何だか今のソヴィエッ
トの形容であるかの如くにも感ぜられます。人の好い私は昔のように今日もまた欺かれて居る

のでしようか。または敗けた日本が、おかげで割合に進んでいるのでしようか？

七頁の終り二行目にある「一國の場合も同様」だと云うことも、やつと私は此頃強く感じています。昔は兎もすると個人の間に喧嘩が絶えなかつた。徳川時代末期など、笹川の繁蔵という時代は殊にひどかつた。それが今日では個人間の争はずつと減つていきます。是れは個人個人の平均道徳が向上した爲めです。個人が賢くなり、他人を敬い愛する事を覚えたからです。

細胞が身体を作るように國民が集まつて國家という有機体を作ります。此國家はまだ然し、徳川末期の個人のように、個體國家としての教養が實に低く、それを組み立てる細胞もお互同志の間には民主々義を持ちながら、國となるとそれを無視し勝ちで、國の爲めには詐謀も敢て之を行うというような氣持ちがまだ相当強いのです。(政党と云う有機体にも此傾向が強いのではないのですか?)それで今の國家は昔のばくち打ち等のように体面を強く顧慮したり、間違つたり悪い事をしたりしても何とか言いこしらえて、誤魔化そうとし、決して個人間のように悪るかつたとあやまりません。あやまるのは戦争して敗けた時だけです。これではいけません。國家なる個體が、もつともつと修養し、隣國を尊重し、めい／＼の道徳を高めては、本當

最後また十篇の終りから五行目四行目にあるように結局は唯基督による救いという事が動かぬ世界への唯一の希望のかけはしとして残されるとか、一八三頁から一八四頁にあるように彌陀の誓願に助けられ、往生を信じて申す念佛への賛美、單純、素朴、純眞、おおらかの賛美、自分もお念佛をしよう、眼を閉つてお念佛をしようと思う心。是等の心こそ眞に平和への道であることに疑はありません。只此信仰は個人の力だけではいけません。國も道德を持ち宗教によつて救われるまゝに行かなければいけないと思います。國家が宗教を持つたなら間違えば地球を火球に爆発させないと必しも云い切れないような水爆の製造競争などは起きないでしょう。本当に上官に暗示されて見す見す無罪の身を犠牲にして、それも、いや／＼犠牲にして所刑される終りから二番目の學生さん、読んで実に遺憾、残念、齒が痛い何とも云い様のない不合理さ、物足りなさ。

私の子供等も甥等も四人が四人皆生還して呉れました。子供二人は肺病になつた爲だつたが、それも癒えて、皆私に孫をくれました。それにつけても此本の親御さんたちに心からなるお悔みを述べたい。そして共に／＼世界平和への道に精進したいと切願いたします。

(二五年四月上旬 方南齋牛小屋にて記す)